

平成27年度
福島大学 人間発達文化学類 スポーツ・芸術創造専攻 推薦入学試験
小論文<芸術>

問題

以下のA. (音楽), B. (美術) から、一題を選んで論述しなさい。

選んだ問題の記号を、解答用紙の【 】に必ず記入すること。

(注意事項: 解答用紙の1マスを1字とする。句読点も、行末の場合を除き1字と数える。算用数字やアルファベットは、1マスに1字入れることとする。)

*原文が常用漢字以外のところは、一部「ふりがな」をふってあります。

*出題に当たり、原文の一部を変え、説明が必要な語句には注を附しています。

A. 次の資料は、ハワード・グッドール著、夏目大訳『音楽の進化史』(河出書房新社、2014年)から、一部抜粋したものである。これを読んで、下の(1)(2)の設問に答えなさい。

この部分に記載されている文章については、著作権法上の問題から公表することができませんのでご了承願います。

(1) この文章内容を、300字以内で要約しなさい。

(2) 西洋音楽の特質について、あなたはどのように考えますか。資料と関連付けながら、あなた自身の知識や経験を交え、700字以内で論じなさい。

B. 次の資料は、千住 博著『美術の核心』（文芸春秋文芸新書、2008年）から、一部抜粋したものである。これを読んで、下の（1）（2）の設問に答えなさい。

印象派 - 「何だ、こんなの印象だけじゃないか」

印象派という名称には、何か美しい感じがありますね。あたたかい日だまりや平和なイメージが思い浮かびます。しかしこの名称、そもそもはクロード・モネの作品に対する嘲笑^①の言葉であったことをご存知でしょうか。モネが展覧会に出品した「印象・日の出」という作品に対する、「何だ、こんなの印象だけじゃないか」という批判の文言だったのです。

当時のフランス、即ち19世紀後半のパリ画壇では、まるで見たように嘘を描く作品、と言っては何ですが、背中から羽根の生えた天使が空中にリアルにほんわかと浮かんでいる様子とか、見たこともない歴史的な事件を実に精緻^②に描いた歴史画の大作などが一世を風靡^③していました。天才ドラクロアのロマン派、巨匠アングルの新古典派という流派ですが、それを「面白くもおかしくもない。こんなの嘘だ」とモネたちは感じたのです。それゆえ彼らはリアリティーを求めて模索を続けました。そしてその結果、描いた作品に対して、「こんなの印象だけ」と言われたわけですから、あんなに言われたくない、という思いでさぞかしむかついたのではないのでしょうか。「じゃあ、あんならは何なんだ！羽根のはえた天使が浮かんでいるのを本当に見たのか？」と詰め寄りたい気持ちをおさえて、モネたちの運動は続くのですが、このモネを中心にした一群の仲間たちがのちに「印象派」と呼ばれるようになったのです。

印象派の大きな特長は、とにかく太陽光線の生み出す現象に、見たまま感じたまま忠実であろうとしたことです。物の固有の色、例えば黒い服とか紫のスカートとかよりも、それを光の下にひっぱり出した時、果たして人間にはどう見えたか、どう感じられたかという方を優先したので、黒い服でも燦々^④とふりそそぐ太陽と青空の下では反射を受けて青く見えることや、影もよくみるとグレーではなく、紫色や赤みをおびた茶色をしていることに気がきます。また建物の色も夕焼け時から日が沈む頃ならば、空の影響を受けていろいろに変化するということを見て感じ取り、それをできるだけ素直に描こうと努めました。ですから印象派の作品では影に赤がぬってあったり、緑がぬってあったりと意外な色を発見します。その方が日だまりの中の温度感や湿度、質感に忠実に影の暗い部分を描ける、と直感的に思ったわけです。いわば右脳の発想ですね。やわらかさやあたたかさなど、何よりも人間の五感で感じる雰囲気伝えることに主眼を置いていたとも言えます。

（中略）

世は19世紀後半。芸術はしばしばその時代の哲学や思想とお互い刺激しあって展開するものですが、この時代、世に蔓延^⑤していたのは「ニヒリズム」、即ち「虚無主義」でした。虚無、即ち何かなくなった状態です。その何かとは言うまでもなく、当時の最高の価値としての「神」でした。それはニーチェの「神は死んだ」という言葉となってあらわれるのですが、当然死んだのは神一人だけではなく、この世界がはたして実在しているのかどうかさえあやしくなってきたというわけです。疑うこともなく、あまりに長い歳月を費やして信仰してきたキリスト教への不信ですから、今までの世界観や価値観など、本当は無価値無意味だったのではないかという疑問に襲われることは当然かもしれません。

ではなぜ「神」に対する不信感が生まれたのでしょうか。天使が中空に浮かんでいるなんて嘘だとなってしまったのでしょうか。それは産業革命、そして近代化、即ちモダニズムといわれる科学の台頭、物質文明の登場が大きな原因だったと私は考えています。

「人間の知恵と政治と科学でより良い世界が生まれる」と信じる社会、これがモダニズム社会ですが、そこでは当然「愛」とか「神」とかよりも「計算してはかれる価値」の方がリアリティーが出てくるわけです。科学的に「神」を説明できるのだろうかという疑問が生まれ、その結果、神の位置にとってかわったのが物質、もっと言えば金で買えるもの、といった現実的な結論でした。神がいなければ、神を頂点とする力学の中で成り立っていたそれまでの教養主義や歴史観、人々の間でバランスをかりうじて保っていた階層的な差別意識、善悪の判断基準などはふき飛んでしまいます。

この精神的に不確かな感じを用いて絵にしたのがいわゆる印象派でした。ですから熱心なクリスチャンであったセザンヌは、印象派を実体から離れすぎと批判し、ゴッホを現実から遠いと切って捨て、かえす刀でピカソに対してもそのエゴ（自我）に満ちた画風を、まるで自らを神と考え違っているようだと批判したのです。

しかし、結局モネはその新しい視点を通して、当時のヨーロッパ美術の観念的なリアリティーを否定しながら、草のこすれる音、土のにおい、温度感などの人間としての五感で感じる真のリアリティーに到達していきました。人間として、という感性を優先する真実追求の視点は、ヨーロッパ社会において長く忘れられていた価値観でした。

モネの周囲に集まり、散っていった多くの作家たちは、大変ユニークで豊かな才能に恵まれました。好んで娼婦を描いたマネ。社会の底辺の人々をも含め、様々な階層を差別なく並列的に描いたドガ。暖かさや微笑を、それが世の中に一番必要なこと、とまるでベトナム戦争時代のフラワーチルドレン^⑥のごとく、ピース、ピースと何百枚も描き続けたルノワール。様々なモチーフを赤、青、黄の点だけで描いて、そばで見るとただの点の集まりにしかすぎない画面が、遠くに離れてみると世の中や風景画をあらわしているというスーラの点描画法など、まるでオフセット印刷機のような視点で、今から考えてもあまりにも新し過ぎる、と感じさせてしまうものもあります。彼らは皆、キリスト教の教条主義によってがんじがらめにされていたそれまでの教養主義や差別を撤廃し、全く新しい自由な見方を声高に謳^⑦い上げていました。印象派は近代化の中でおこる人々の意識の変化を伝えることのできた一大メディアだったのです。

- 注 ①嘲笑 — あざけり笑うこと。 ②精緻 — くわしく細かいさま。
③風靡 — なびくこと。大勢の人を従わせるさま。④燦々 — 光がきらきらと輝くさま。
⑤蔓延 — 好ましくないことが広がること。
⑥フラワーチルドレン — 平和と愛の象徴として、身体を花や花模様で飾った人々のこと。

（1）この文章内容を、300字以内で要約しなさい。

（2）印象派がその後の美術の展開に与えた影響とは何でしょうか。あなたの考えを、資料と関連付けながら、あなた自身の知識や経験を交え、700字以内で論じなさい。

平成27年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

人間発達文化学類 スポーツ・芸術創造専攻
推薦入試Ⅰ (芸術 (音楽・美術))

音楽と美術に関する文書資料を提示し、それに関して1000字程度で論述させることにより、読解力、論述能力、および芸術に関する知識や関心を総合的に見ることをねらいとする。